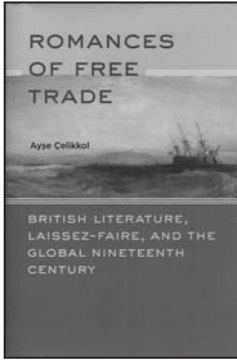


書 評 REVIEWS



Ayşe ÇELIKKOL,
Romances of Free Trade:
British Literature, Laissez-Faire, and the
Global Nineteenth Century
(x+189 頁, Oxford University Press, 2011 年)
ISBN: 9780199769001

(評) 玉井史絵
Fumie TAMAI

歴史家バーナード・センメル (Bernard Semmel) が *The Rise of Free Trade Imperialism: Classical Political Economy: the Empire of Free Trade and Imperialism 1750-1850* を 1970 年に出版して以来, 19 世紀イギリスが, 自由貿易にもとづくいわゆる〈非公式の植民地〉を世界各地に拡大して帝国主義を確立したという議論はほぼ定説となっている。そして, 文学批評においてもパトリック・ブランドリンガー (Patrick Brantlinger), スヴェンドリーニ・ペレーラ (Suvendrini Perera) はじめ多くの批評家が, 自由貿易という歴史的コンテクストのなかで文学作品を分析し, 作品に内在する帝国主義的要素を明らかにしてきた。このような流れのなかで書かれたアイシャ・チェリコール (Ayşe Çelikkol) の *Romances of Free Trade: British Literature, Laissez-Faire, and the Global Nineteenth Century* が検証するのは, 自由貿易の帝国主義的側面よりはむしろ, それがイギリス国内にもたらす衝撃である。1846 年の穀物法撤廃は自由貿易体制を象徴する出来事だが, 撤廃以前も以後も, 自由貿易をめぐる議論は常に, 商品, 資本, 人の循環が加速することで国家の壁が消滅してしまうのではないかという不安や危惧とともにあった。自由貿易とは単に経済上の問題ではなく, 国家の自律性やアイデンティティに関わる問題でもあるのだ。

チェリコールは自由貿易をめぐる議論が盛んであった 19 世紀前半のイギリス文学が, いかに国家の自律性が失われることへの不安を表象したかを検証する。文学における混沌とした商品や人の循環の表象は, 資本の自由な移動を前提とする資本主義と, 安定し閉ざされた共同体を前提とする国家との緊張関係を浮き彫

りにする役割を果たした。本書ではウォルター・スコット、シャーロット・ブロンテ、チャールズ・ディケンズといった主要な小説家から、ハリエット・マーティノー、ジョン・レトソン・エリオット、トマス・サール、エベニーザー・エリオットといったマイナーな作家、劇作家、詩人まで、実に多岐にわたる作品群を通して、この循環と閉鎖の緊張関係が明らかにされていくのである。

資本主義がもたらす国家への脅威を描くのに作家たちが用いたのは、現実世界からはかけ離れた状況でヒーローの冒険や恋愛を描くロマンスの枠組みだったとチェリコールは論じる。ロマンスはリアリズムと異なり、社会を支配する様々な制約に束縛されない想像上の世界を描くことが可能であり、それゆえに国家規制を受けない自由貿易を表象するのに適した媒体となったのだ。

序章に続く最初の2章は穀物法撤廃以前の小説を取り上げ、〈自由〉という概念がはらむ問題について論じている。まず、第2章ではスコットの『ガイ・マナリング』(1815年)と『レッドゴントレット』(1824年)における密輸業者に焦点があてられる。国家統制の網の目をくぐって物資を運搬し売買する密輸業者は、18世紀から19世紀前半の穀物法撤廃以前のイギリスではしばしば〈自由貿易商〉(free trader)と呼ばれていた。スコットは日常生活の束縛から解放されて様々な冒険を経験する密輸業者をロマンスの伝統に則って描いていく。だが、彼らの束縛からの自由は同時に、家族や地域、国家といった共同体との絆の喪失をも意味していた。国家の安定を脅かす密輸業者たちの危険な自律性を通して、スコットは自由放任主義に内在する問題を浮き彫りにしているのである。スコットが提起した問題は、第3章で取り上げられるフレデリック・マリアットの海洋冒険小説に登場する密輸業者や船員たちの表象においても顕在化される。マリアットはロマンスの枠組みを用いて、海の自由を謳歌する密輸業者や海賊、船員たちの冒険を描く。こうした人物が表す反権力主義的感情は当時の経済論争において保護貿易主義者たちが最も危険視したものであり、マリアットは国家権力に反抗する船員たちを通して、国家の枠を超えた多国籍の共同体の脅威を暗示している。だが、同時に、彼らの様々な冒険譚の連結から成るマリアットの小説構造自体が、自由の快楽を体現するという矛盾をはらみ、自由と統制のはざまでの葛藤を表現しているのである。

自由貿易主義は国家の統制を否定するという点において個人の自律性を重んじるが、そもそも貿易とは人間相互の関係の上に成り立っている。穀物法論争で自由貿易を支持する側の人々は、自由貿易こそが世界の異なる地域間の協力関係を促し平和を構築するのだと主張した。国家間の相互関係はロマンスという枠組みのなかでは男女の相互関係へと置き換えられる。第4章と第5章では自由貿易支持、反対それぞれの立場に立つ作家たちが、いかにセクシュアリティのメタ

ファーを用いて自由貿易の恩恵/危険性を表現したかが検証されている。第4章でチェリコールはハリエット・マーティノーの『ドーン・アイランド』(1845年)を取り上げる。この小説のなかでマーティノーが自由貿易の象徴としたのは合理的、自律的な男性の経済人(economic man)ではなく、自然と触れ合い他者と平和的に共存する女性であった。『ドーン・アイランド』は戦争を繰り返して破滅へと向かっていた島民たちが、イギリス人と交易を始めることで自然と共存し平和な暮らしを手にするという物語である。マーティノーは、自由貿易が国家統制以前の原初的で〈自然な〉状態だと強調することにより、資本主義がもたらす孤立への不安を和らげようとした。マーティノーにおいて多産な女性は〈自然な〉自由貿易のもたらす豊かな恩恵を象徴するが、セクシュアリティのメタファーが反自由貿易主義者たちによって用いられるとき、それは否定的な意味合いを帯びるようになる。第5章で論じられるのはトマス・サールとジョン・レトソン・エリオットという2人の劇作家である。保護貿易を支持するこれらの作家の作品において、国家統制の弱体化を意味する自由貿易は、家庭における父権の失墜という形で表現される。情事や恋愛の戯れといった男女の〈自由な〉関係を描くことにより、これらの劇作家たちは市場での規制のない競争や交易の危険性を暗示したのであった。

自由貿易というイデオロギーは、自律性と同時に、他者との共存共栄を可能とする思いやりや共感といった道徳性を備えた経済人を想定して初めて成立する。競争的経済システムが国家間の—そして個人間の—協力的な関係を育むことができるのかという問題は、ヴィクトリア朝文学の主要な小説においても中心的なテーマであった。第6章でチェリコールは、シャーロット・ブロンテの『教授』(1846年執筆)と『シャーリー』(1849年)における経済活動と恋愛のプロットを分析し、経済人がいかに他者への思いやりや愛情といった感情を獲得していくかを考察する。『教授』のコスモポリタンの貿易商ハンゼンは、物語が展開するにつれ、人々との絆を尊重する内面的豊かさを見せるようになる。自由貿易商は血縁を超えて人々との相互関係を構築する能力を有した人間であることが示されるのである。一方、穀物法撤廃後に執筆された『シャーリー』では、自由貿易に対するブロンテのより懐疑的な姿勢が示される。ブロンテは工場主ロバートが愛情や思いやりといった内面を獲得していく過程をロマンスの枠組みを用いて描きつつ、階級や性の不平等がはびこる資本主義社会への疑問も同時に表現した。

本書の最終章で取り上げられるのはディケンズの『リトル・ドリット』(1855-7年)である。マルクスは資本主義の発達にともなって生産と消費が加速し、市場が空間と時間の障壁を越えて限りなく拡大していくと論じた。『リトル・ドリット』において、疫病のように人々のあいだに広がるマードルのビジネ

スへの投資熱はこの資本主義の拡大を表している。さらに、牢獄の壁、国境の壁、家の壁などあらゆる障壁を乗り越えて「ここでも、そこでも、どこでも」出現するリゴーも、モノと情報が加速的に循環する資本主義の表象と捉えることができる。ディケンズはゴシック・ロマンスの手法を用いてリゴーを描くことにより、もはや個人によって制御できない加速的な商品流通の恐怖を表現した。経済学は個人の利益を追及する自由を擁護し政府による規制に反対したが、その結果として、市場が個人によってはもはや制御できないぐらいに発達する可能性を秘めている。『リトル・ドリット』のゴシック的サブプロットはこうした〈自由〉に内在する矛盾を捉えているのだ。

冒頭にも述べたように、ヴィクトリア朝文学と自由貿易を論じたこれまでの批評は、文学の帝国主義的側面を強調してきた。すなわち、自由貿易という手段を通してイギリスが世界でのヘゲモニーを確立した時代に、文学は無意識的であるにせよ帝国主義的な文化の形成に〈加担〉したという議論が主流だったのである。チェリコールはこのような議論とは一線を画し、自由貿易がイギリスという国家の概念に与える影響を考察した。「ルール・ブリタニア」の「ブリトン人は断じて奴隷とはならじ」というフレーズに象徴されるように、〈自由〉とはイギリス国民のアイデンティティの根幹を成す概念である。だが、自由であることは、国家であれ家庭であれ、いかなる組織・集団からの束縛を受けないことを意味する。それゆえ、自由はアイデンティティが拠り所とする国家や家庭そのものの権威を脅かす危険性をも秘めているのだ。ヴィクトリア朝文学に表された自由な経済活動と国家との危うい関係を浮き彫りにした本書は、グローバル化が進展し、国境を越えた経済活動のスピードがますます加速していく現代社会について考察する上でも、様々な有益な示唆を与えてくれるだろう。